

中国南部の族譜の多様性とその現代的意味

Varieties of Genealogical Records in South China and Their Contemporary Meanings

瀬川 昌久 (Masahisa SEGAWA) *

キーワード：中国南部、宗族、宗親会、族譜、多様性、情報の秘匿

Keywords: South China, lineage, clan association, genealogical books, diversity, concealment of information

Abstract

The main purpose of this article is to show the diversity of the genealogical records kept by lineages and clans in South China in their social functions, and to understand the background of this diversity, through comparison of various types of genealogies collected in my fieldwork and in library research in China and Japan. First, I classify the collected genealogies according to the styles of description. Then I select two contrastive genealogical records and make a comparison in detail. One is a genealogy of the Yangtang Yang family from Danzhou County, Hainan, which contains only a genealogical tree written on a sheet of large white cloth. Another is a clan genealogy which is compiled and printed recently by the Li clan association of Hong Kong and Guangdong. They are contrastive in that the former makes every effort to secure the continuity of genealogical line through arrangements such as adoption and the substitution of member's genealogical positions. On the other hand, the latter includes many different genealogical lines even at the expense of genealogical accuracy. These two types of genealogical records roughly correspond to the lineage genealogies maintained in a specific local community, as well as the clan genealogy shared by a wider range of people. At the same time, however, I show that with respect to the recent compilation boom in genealogy, these two levels of compilation activity often relate to, and complement each other. It seems that the recent prosperous condition of the local economy and the increased flow of people and information between the South China homeland and Hong Kong or overseas communities lead to more diversity in the style and contents of the genealogical records of lineages and clans.

1. 族譜の多形性について

中国南部地域の宗族が一族の歴史ならびに族員の記録として編集し保有する文書は、一般に「族譜」と総称されているが、それが実際には多様な形式、内容をもつことをすでに筆者は前稿 [瀬川 2004a] において検討した。本論文においては、まず系譜筆記の形式ならびに付随する情

* 東北大学東北アジア研究センター

報の種類に注目してその多様性を検討した上で、対極的な形態としての海南省儋州市地域の村話話者系諸宗族の族譜と、儋州市や広東省地域においてより広域的に活動する宗親会が編纂する族譜についての比較を行い、現代的コンテクストにおける宗族復興・族譜編纂事業のもつ意味を考察したい。

「族譜」と総称される文書は極めて多様な形式・内容をもっており、多部数のコピーが一度に印刷製本された豪華なものから、みすばらしいノートの切れ端に手書きされたものまで存在する。後者のような形態のものを取えて「族譜」という範疇に含めるべきかどうかについては議論があるところであろうが、筆者としてはこれを除外する根拠は根本的に見出し得ないものとする。

第一に、現地の人々が自分たち一族の「族譜」だと称しておもむろに取り出してくる文書は、その外形や装丁の如何を問わず「族譜」としての機能を有するものとして認めないわけには行かない。しからば第二に、その「族譜」としての機能とは何かというに、それはある一族の祖先の系譜情報を集的に記録しているということに尽きる。筆者の知る限り、系譜情報を含まない芸集や家訓書あるいは儀礼マニュアルのみの場合には、如何にそれが一族の祖先ゆかりのものであったり一族の歴史を表象するものであったりする場合でも、子孫たちによって「族譜」として言及されることはない。また、特定の一個人の事績のみを記した文書というよりは、集的に多数の世代にわたる祖先（たち）の系譜を含んでいるものがそう呼ばれる。

このように、族譜の基本的機能に関わる祖先の系譜情報だが、その記載の方法には多様な形式がある。清代以前の版本の族譜の系譜記載形式を分類した陳捷先 [陳捷先 1999: 36-41] によれば、その形式は「歐陽式図譜」、「蘇氏宗譜法」、「宝塔式図譜」、「牒記式世系表」の4つに分類できるといふ。

「歐陽式図譜」は、歐陽修によって創始されたもので、族譜の各頁を3段、5段、あるいは9段等に横罫により区分し、各段ごとに世代別に祖先名、生没年、妻・子女についての情報等を書き込むものである。世代秩序は明確だが、父子が上下に直列して記載されるとは限らず、誰が誰の子であるかは付記されている情報を読まないで判然としないという特色がある。

「蘇氏宗譜法」は蘇洵により考案されたものといひ、ある祖先の直下にその息子たちが記載されるように配置され、必須ではないがその間の親子関係を縦線で連結して明示する場合も多い。長子の長子の長子といった宗孫系列が頁の右端に直列し、出生序数が大きい系統ほど頁左へずれて記載される特色をもつ。これは、宗法を重視する観点から、単に世代秩序のみではなく五服の親疎関係を系譜記載上の配置に反映させるべく編み出されたとされる。各祖先についての記載事項は、字、諡、号、妻の姓程度であり、「歐陽式」に比して概して簡略である。

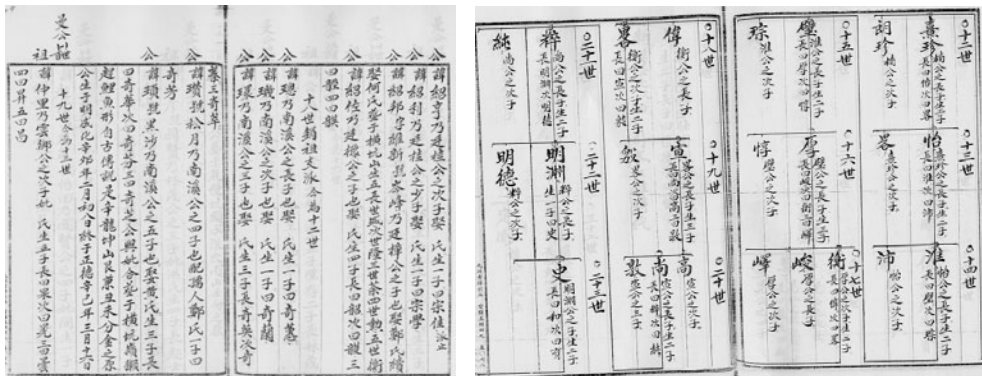
「宝塔式図譜」は誰の発明によるものかは定かでないとしているが、すでに南宋代には存在したという。この形式の族譜は、父子間の系譜関係を縦線で直結してゆく点で上記の「蘇氏宗譜法」

にも似るが、後者が長子の系列を頁の右端に固定して記載するのに対し、前者は常に息子を父の直下に均等に配置しようとする。したがって、始祖は系図全体の最上段の中央に位置し、子孫はそこから左右対称に下方に向かって広がる形で配される。形態的には人類学者が描く親族関係図に最も近い形となる。この形式では、記載すべき祖先の数が多い場合には、始祖は最初の頁に登場するとは限らず、最初は最新世代のみが現れて、次第に上の世代の段にも祖先が現れ始め、中央頁に至ってはじめて始祖が登場するという形態となる。この形式も「蘇氏式」と同様に各祖先についての記載情報は簡略である。

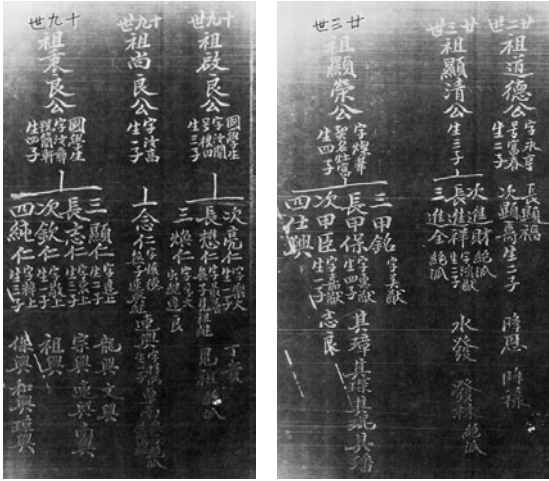
「牒記式世系表」も発明者は不明だが、陳捷先は「歐陽式」から派生したものと推測されるとしている。この形式は、系譜関係の全体構造を空間的・視覚的に図示することをあきらめ、その代わりに各祖先の名前、生没年、妻・子女についての情報、さらには功績、人格等についての情報を個別に記述してゆくものである。系図としての性格よりも、文章記録としての性格が強い。その分だけ紙幅の制約を気にせずに各祖先に関する情報を詳細に記述して行ける点に特色がある。

次に、筆者がこれまでに収集した族譜の中から、主要なものを取り上げてその系譜記述の形式を分類してみることにする。まず、香港新界の宗族が保有している手書き族譜類。

1-1. 錦田鄧氏『師儉堂家譜』



香港新界原居民の本地系宗族の中でも最大勢力を誇る錦田鄧氏の一分節が保有するこの族譜は、1966年に鄧永寿によって編纂され手書きされたものである。族譜本体部分を構成する商代始祖・鄧曼以来の各代祖先についての記述は、基本的に「牒記式」の形態を採っている。そして、その後に附録された「鄧氏歴代統系表」は、基本的に「蘇氏式」に準じた表格形式を採用している。ただし、「牒記」部分も表格部分も遠祖に関しては傍系の多くを省いた記述法を用いている。

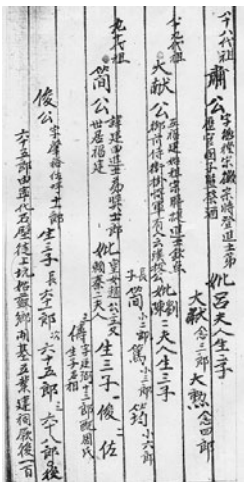
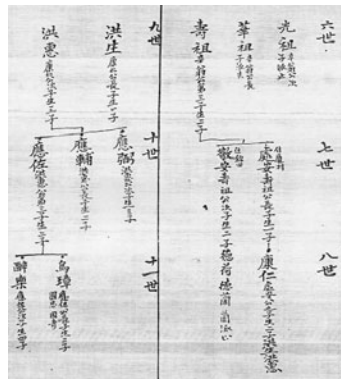


1-2. 厦村鄧氏『鄧其璠族譜』

上述錦田鄧氏と同系の本地系大宗族・厦村鄧氏の一分節（洪賢房）が有する手書きの族譜。この族譜も各祖先についての「牒記式」記述と、それに続く表格部分からなるが、この族譜の表格は共通祖を子孫の中央に配する「宝塔式」を採用しながら、それを数頁に分割して記載する形式をとっている。

1-3. 厦村鄧氏『鄧氏族譜』

同じく厦村鄧氏の別の分節（洪恵房）の保有する手書き族譜。この族譜も主要部分は祖先各個人についての「牒記式」記述から構成され、特に村の開基祖以下の部分は傍系祖先も含めた各



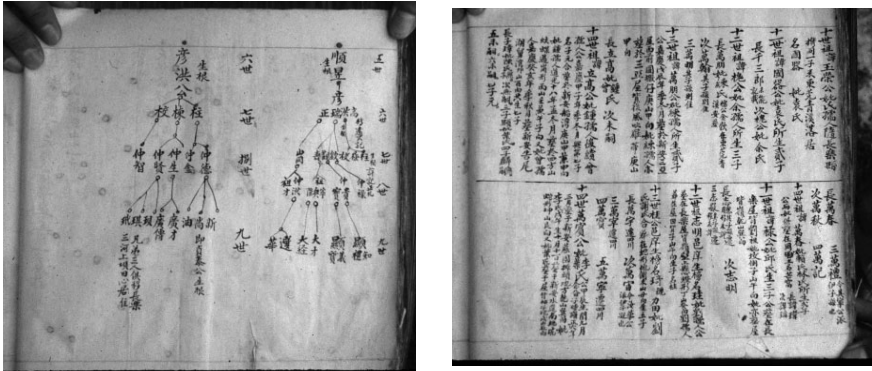
代祖先を世代順に網羅的に記載している。また、末尾近くには抄録者の直系祖先のみを記載した表格が付されているが、これは傍系が省かれているので、厳密には「宝塔式」とも「蘇氏式」とも言い難い。

1-4. 水流田鄧氏『鄧国族譜』

これは同じく鄧姓だが、上述3例の本地系 氏とは別系統の客家系鄧氏の族譜である。清末光緒年間に編纂され、以降

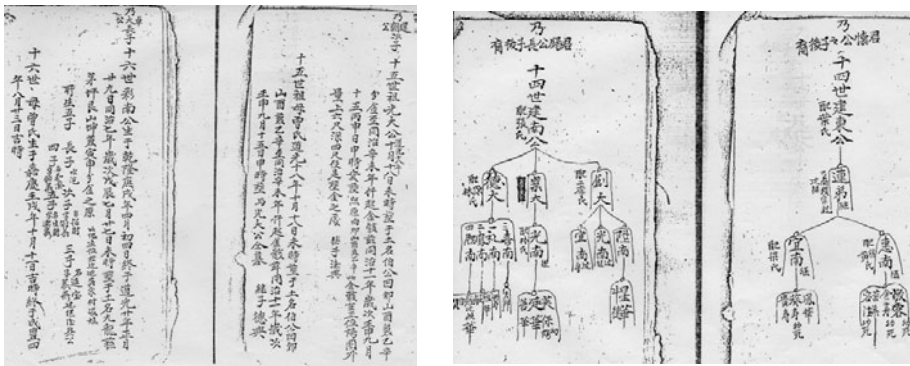
加筆された手書きのもの。この族譜も商代の鄧曼からはじまるが、すべて祖先ごとの「牒記式」の記述で、表格部分はない。

1-5. 横台山梁氏『梁氏族譜』



同じく客家系の宗族の民国6年（1917年）編の手書き族譜。梅県および長楽県居住の遠祖については「宝塔式」による「梅州世系總図」が付されているが、香港新界地区の開基祖以下の系譜については「牒記式」の記述のみである。

1-6. 蓮花地郭氏『郭氏族譜』



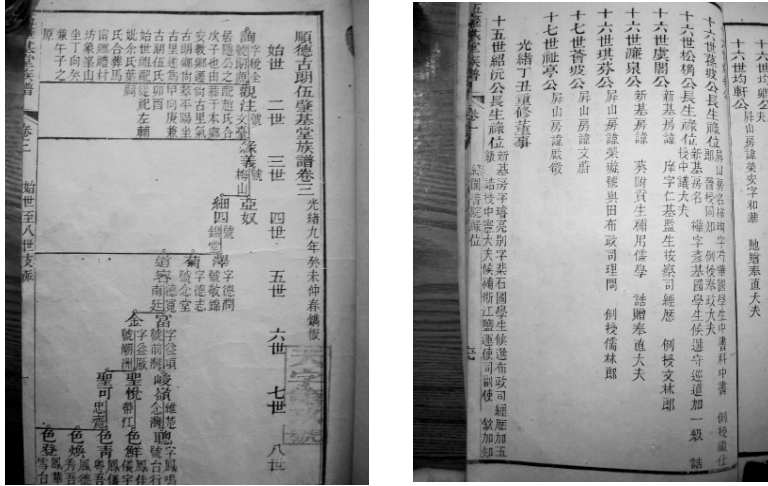
香港新界の本地系宗族の中では小規模な宗族。光緒5年（1879年）編、以降加筆の手書き族譜である。この族譜も本体部分は明代以来の祖先に関する「牒記式」の記述であるが、末尾部分には村の開基祖以下の祖先の分節概略についての「宝塔式」の系図が付されている。

以上、香港新界の宗族が保持している清末以降編纂の族譜に関しては、本地系、客家系とを問わず、主として文章による系譜関係の叙述を中心とした「牒記式」のものがほとんどである。た

だし、系譜や分節間系の概略を簡明に表すために、補助的に「宝塔式」または「蘇氏式」の表格が付されていることもある。

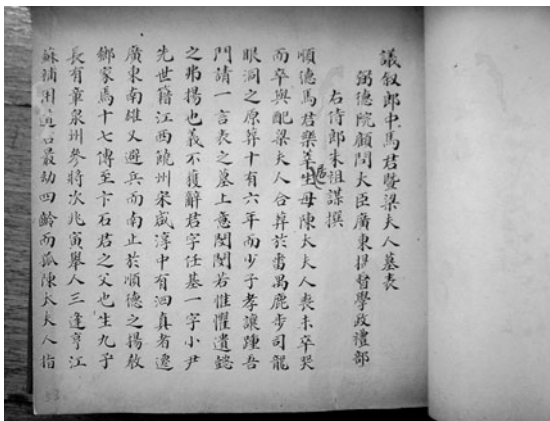
次に、中国本土で収集した族譜についてその系譜記述の形式を概観してみる。

1-7. 広東省佛山市順徳区古朗伍氏『伍肇基堂族譜』



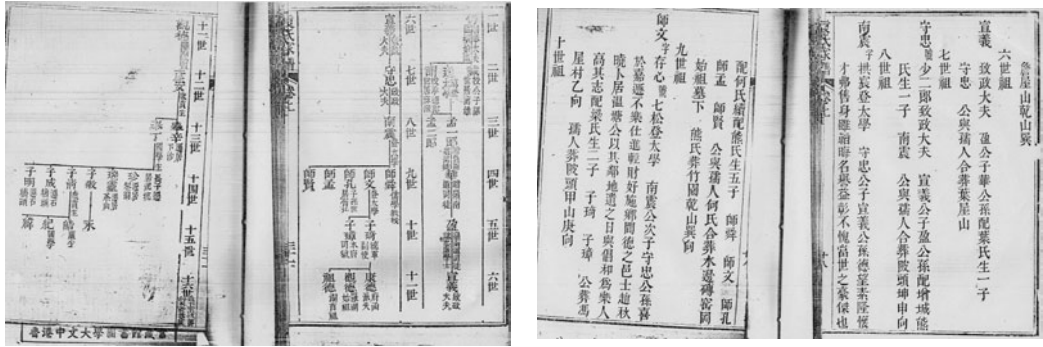
この族譜は2004年11月の現地調査により、現地で閲覧、一部を撮影した。光緒9年（1883年）に編纂された全10巻の刻本版族譜である。首巻で一族の来歴や共通遠祖の系譜を述べた後、各分節ごとに巻を分かって編纂されている。全体としては祖先個人についての事績を世代別に記述した「牒記式」の部分が大半を占めるが、各分節の巻にはそれぞれ典型的な「蘇氏式」の形式による系図が付されている。

1-8. 広東省佛山市順徳区楊教馬氏『馬氏宗譜』



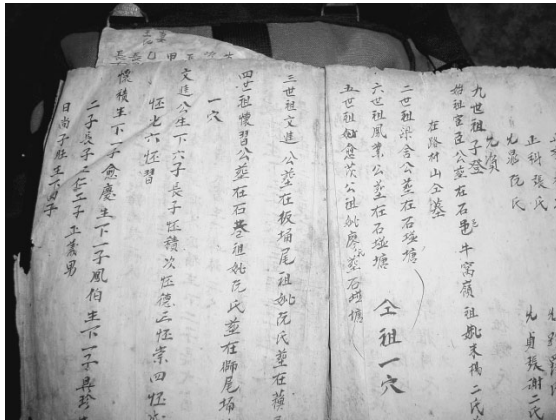
これは順徳区西北端の樂從鎮楊滘村の馬氏一族の族譜であり、民国7年（1918年）までの記事がある。現在、原本が広州市の孫中山文献館に保存されている手書き族譜である。この族譜は、序文と末尾を除くほとんどの部分が村内の分節の系譜関係の記述に当てられているが、記述の様式は祖先個人について簡略な情報を列記した「牒記式」である。

1-9. 広東省深圳市羅湖袁氏『袁氏家譜』



羅湖袁氏一族は今日の深圳市南部の一角に居住していた宗族で、この族譜は民国8年(1919年)編纂の刻本版族譜であるが、そのコピーが香港注文題の図書館に所蔵されている。内容は、やはり「牒記式」により世代ごとに祖先各個人の情報を列記している部分が大部分の頁を占めるが、入粵祖から村の主要分節始祖までの15世代にわたる「蘇氏式」の系図を含む。

1-10. 海南省儋州市蘭洋鎮南羅村梁氏『族譜』



2002年の実地調査の際に現地で閲覧、一部撮影した族譜。南羅村梁氏は客家系の人々だが、周囲の黎族と通婚したこともあって、現在では村内の多くの者が黎族籍を有している。族譜は咸豊2年(1852年)編纂の手書き族譜で、その後も加筆されている。形式は祖先ごとの情報を列記した「牒記式」のみの記述からなる。

1-11. 海南省儋州市三都鎮顏塘羊氏『族譜』

(写真は次々頁のものを参照)

2003年の現地調査の際に閲覧・撮影したもの。この顏塘羊氏は儋州市地域の複雑な方言分布のうち、儋州話(村話)の話者から構成される。この村話話者の宗族が保持する族譜は極めて特異な形状のものであり、すなわちタタミ数畳分もある大きな一枚布に系図のみを墨書したものである。その系譜記載の形式についていえば、まさにそれは「宝塔式」そのものであり、開基祖から末広がり下段に向かって放射状に系譜が描かれている。この地域で「族譜」とされるのはすなわちこの一枚布のみであり、他には祖先個人についての「牒記式」の記載はもとより、序文

等も付されない。

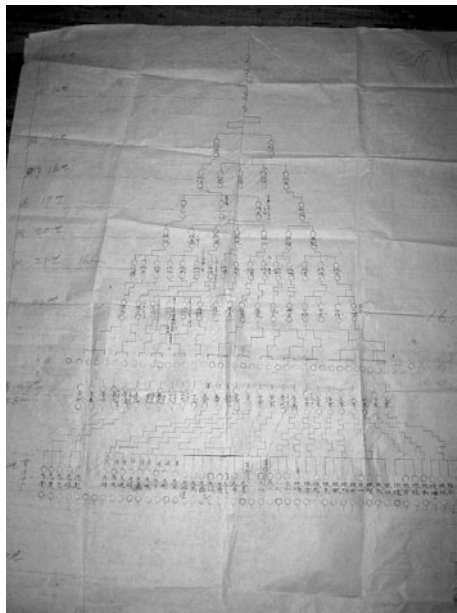
以上のように、族譜といってもその系譜記載の形式は多様であるが、少なくとも広東省地域においては、清末民初の時点で「牒記式」を主要部分とする族譜の形が一般化していたことが窺える。それに付随する形で一族全体または上代祖先部分の系譜の概略が、「蘇氏式」または「宝塔式」の系図で示されることもあったが、それはあくまで族譜のごく一部を構成するにすぎず、紙面の大半は序文ならびに「牒記式」による祖先各個人についての文章による叙述が占めている。こうした形式は、印刷された版本族譜、手書きの抄本族譜の如何を問わず一般的であることが分かる。

この点で極めて特殊なのは海南省儋州市地域の村話話者グループの宗族が保持する一枚布形式の「族譜」であり、これは文章による一族の来歴や祖先の事績の叙述を排して、もっぱら系譜関係のみを「宝塔式」系図により図示することに特化している点に特色がある。

2. 族譜の一極限形態：海南省儋州市村話話者グループの巨大族譜

海南省儋州市地域の族譜の実例に関しては、2002年11月の実地調査の過程において、木堂鎮来山村阮氏のものを見学する機会を得た。これは、60年に一度の改訂時にものみ開封される一枚布製の大型族譜本体から、必要分節の部分を紙に書写したものであった。(右の写真参照)

その後、2003年11月には同市三都鎮顔塘村において同種の形式の族譜を実際に見学する機会を得た。顔塘村は周囲のいくつかの集落とともに羊氏一族が住民のほとんどを占める集落であるが、集落内に居住する族員の系図を書き記した族譜を保有している。族譜は一枚の大きな白布の上に墨書されたもので、平常は折り畳んで赤い布に包んで祠堂内に保管してある。



木堂鎮来山村阮氏の族譜

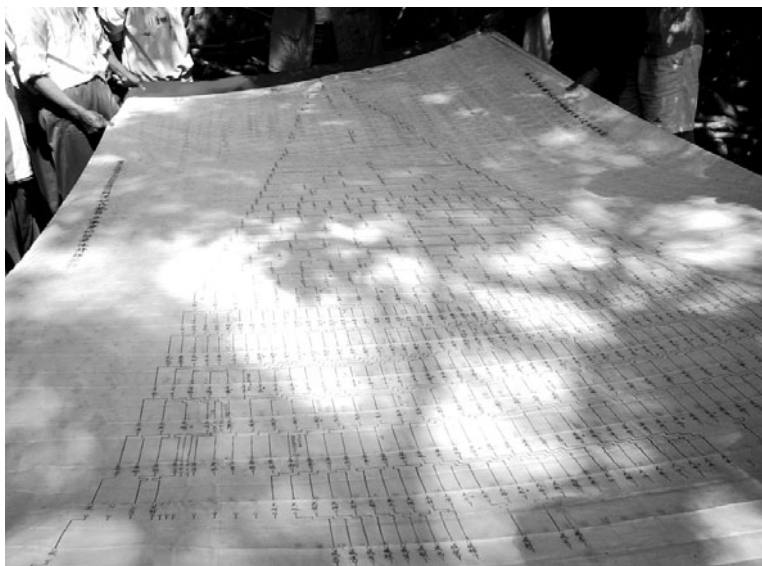
この種の族譜の著しい特色は、手書きの原本が一部のみ存在する点である。ただし、この顔塘村の族譜は、儋州市地域全体の羊氏の系譜を網羅した『宗譜』から、同村にかかわる一部の系統のみを書写したものである。来山村阮氏のものと同様、この羊氏の場合も原本は通常は非公開で、数十年に一度の族譜改訂の機会にのみ開かれる。前回改訂されたのは、族譜上の文字から民国4年（1915年）であることがわかる。儋州市地域の羊氏全体の『宗譜』は、2004年初に約90

年ぶりに修訂される予定であるということであった。修訂に際しては、「開譜」という儀礼が行われ、地域内各地の羊姓の人々が参加するという。

筆者は、この儋州羊氏の「開譜」儀礼を直接観察する機会を得ることはできなかったが、現地の協力者に頼んで儀礼の様子を録画してもらった。映像から見る限り、「開譜」儀礼は非常に大規模なもので、地域内の羊姓の男性たちが長袍姿に正装して参加し、供物と生きた鶏などの犠牲を捧げて祠堂を礼拝する儀礼を行った後、修訂された新しい族譜を祠堂に納めた。また、「開譜」儀礼と並行して、死者の鎮魂儀礼である「做斎」が行われた。同儀礼は、各家族ごとに自家の近時の死者のために大きな紙の祭壇を設け、その前に小屋がけて家族が服喪するとともに、道士が壇を設けて経文の誦読などを行うものである。夜には紙の祭壇類には電灯が灯されて幻想的な光景が出現する。そして、一連の儀礼の最後には祭壇類は紙銭等の供物とともに焼却される。

これら儋州市地域全体の羊氏の『宗譜』の改訂に合わせて、顔塘村独自の族譜も修訂されたものと推測されるが、この点は確認できていない。普段非公開であるはずの顔塘村の族譜を2003年11月の調査の時点で筆者が閲覧する機会を得たのも、たまたまこの宗譜改訂の間際に遭遇したことによるものと推測される。以下は、筆者が見ることのできた改訂前の顔塘村羊氏の族譜、すなわち民国4年修訂の族譜をもとに、この種の族譜に記載された系譜情報について、その特色を検討する。

大きな一枚布の族譜の上に記載されているのは系図のみであるが、「始祖」以下三十数代にわたる祖先の系譜が放射状に広がる形で空間的・可視的に描述されているのは壮観と言うべきである。系譜の記載形式は前節で述べたように「宝塔式」に分類できる（写真参照）。ただし、村内に現生成員がない傍系分節については起点となる祖先以下をすべて省略しているのも、実際に

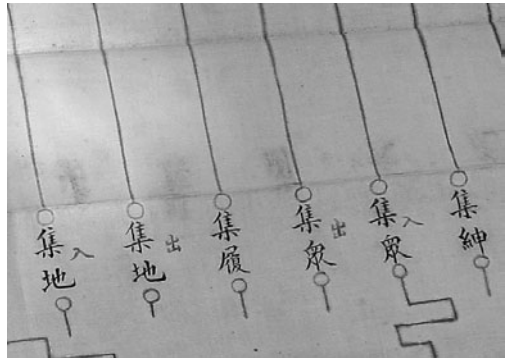


三都鎮顔塘村羊氏族譜

この系譜がカバーしているのは一族の系譜全体の中のごく一部である。

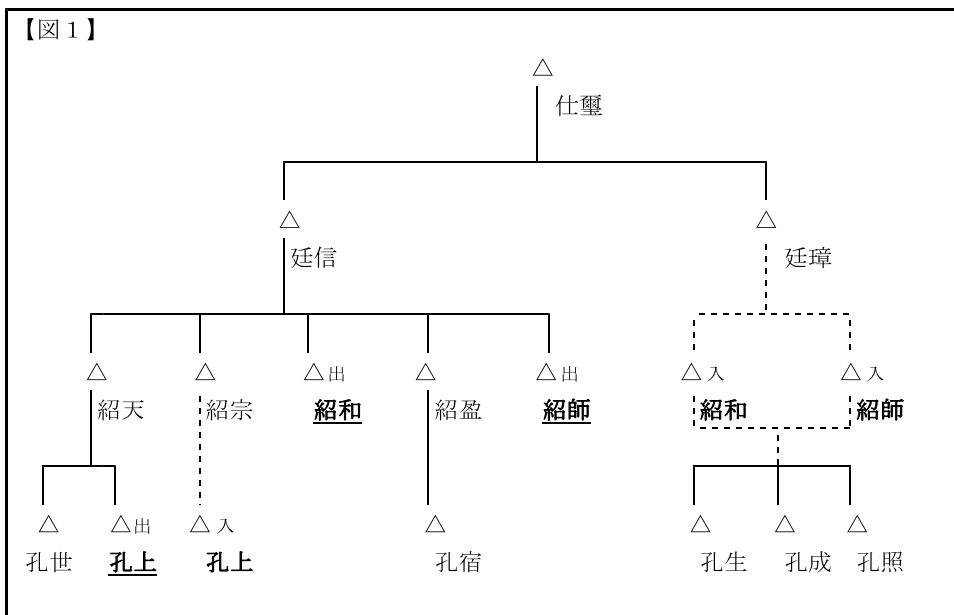
祖先名には世代ごとに「輩字」が付されており、少なくとも最下部の10世代については愈、仕、廷、紹、孔、子、之、集、大、成であることがわかる。しかし、愈より一世代上は、分節によっては個人名が不明のものが、「長子」「次子」「三子」「四子」「五子」とのみ記載がある。各世代の祖先名はいずれも横一列に列記され、上下の系譜関係は朱線で連結されている。長子、次子等の出生順を示す情報については、上述の個人名を「長子」等で代替している一箇所を除けば、一切記入されていない。

この族譜の系譜記載方法に関してとりわけ特徴的に思われるのは、系譜情報がきわめて詳細かつ正確に記載されている点である。すなわち、養子としての出入りや、兼祧（複数の祖先の系譜を一人の人物が兼ね合わせて継承すること）などが事細かに書き記されている。たとえば、養出した息子の名前の脇には「出」という文字が朱書きされており、その人物が養取された先には重複してその人物の名前が記入され、脇に「入」の字が朱書されている。



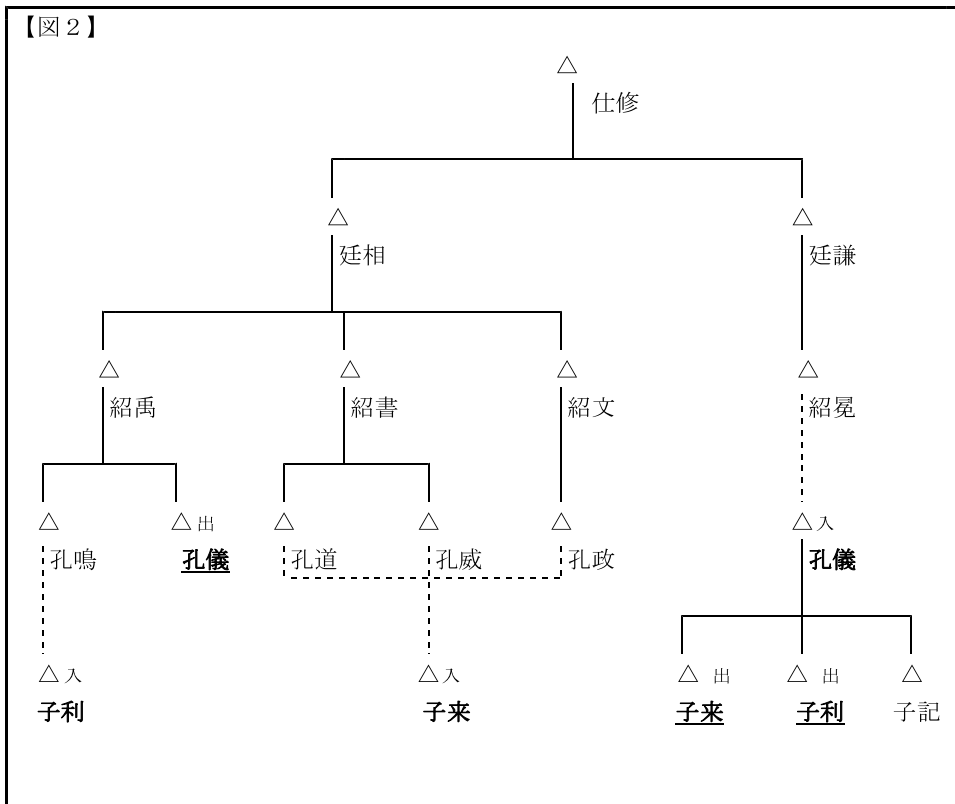
養出／養入についての注記

具体的な事例を述べれば、【図1】に示すとおり、紹宗という人物には息子がいなかったが、その兄弟の紹天には孔世、孔上という二人の息子がいたので、孔上を紹宗の養子とした。系譜上

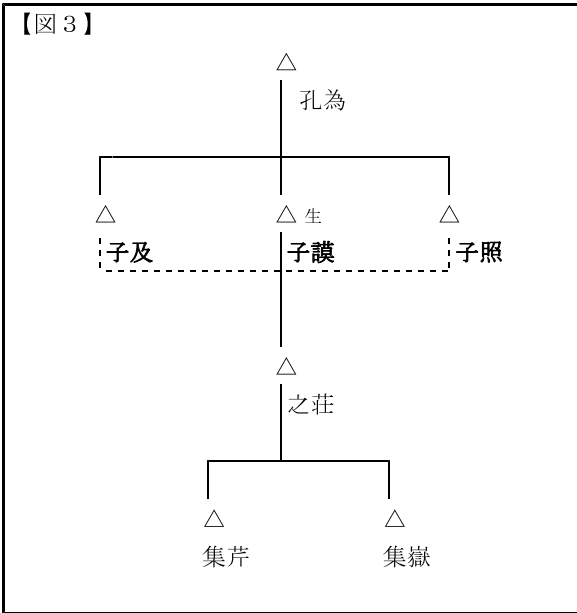


は、孔上は紹天、紹宗兩名の下にそれぞれ記入され、紹天の下の孔上には「出」、紹宗の下の孔上には「入」という字が朱書きで付記されている（写真参照）。また、この紹天、紹宗にはその他に紹師、紹盈、紹和の3名の兄弟がいたが、彼らの父である廷信の兄弟である廷璋には息子がいなかったため、紹天ら5兄弟のうち紹師と紹和の兩名を廷璋の養子としていることもわかる。

このように、オジーオイ間または父のイトコーイトコの息子間での養取は、他にも多数記載されている。また、もう少し遠い関係者間に養取がなされる場合もある。たとえば仕修という人物の4世代下までの子孫たちの間の養子のやり取りについて図示してみると、上の【図2】のようになる。孔儀という人物に関しては又従兄弟、つまり祖父の兄弟の孫の位置に養入しており、また子利、子来は曾祖父の兄弟の曾孫の位置に養取されている。



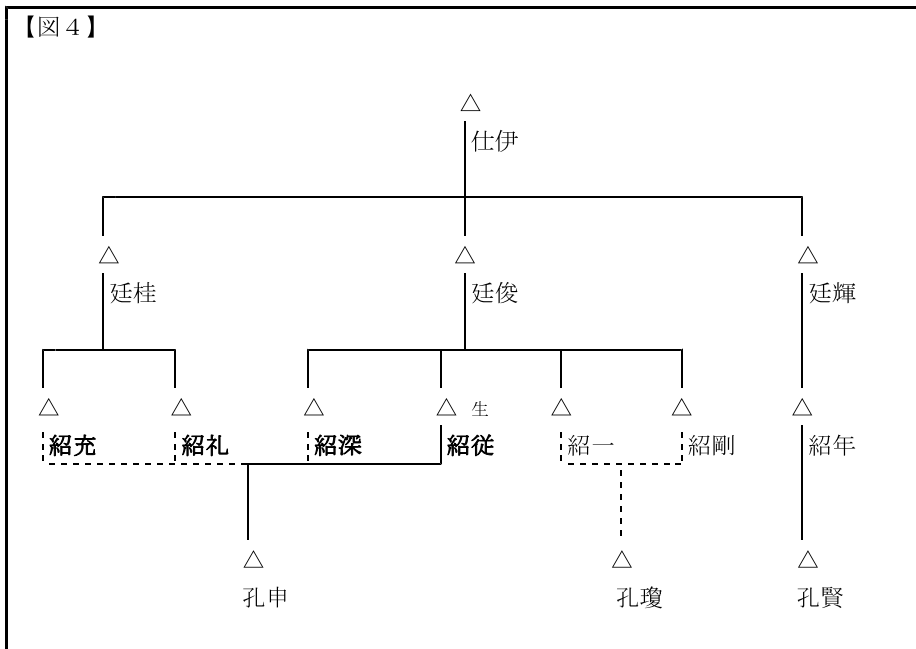
兼祧の事例も少なくない。上述【図2】で、孔政、孔威、孔道という3名の人物の下の世代の系譜は一つに収斂し、養入した子来ひとりにつながっている。つまりこの場合には、息子のなかった上記3名の祖先に対し子来が共通の養子として位置づけられている。また別の事例（次頁の【図3】）では、子照、子謨、子及の3兄弟は、系譜の上で之荘という息子を共有する形になっている。この之荘は、実際には3兄弟のうちの子謨の息子であると考えられる。子謨には「生」という字が朱書で付記されており、これは彼が之荘の生みの親であることを示しているものと推測



される。

また、下の【図4】に示す事例では、紹充、紹礼、紹深、紹従というイトコどうしにあたる4名の祖先を、孔申という一人の男性が兼祧している。この場合も、実際の父は「生」の字が付記された紹従であり、他の3名は息子がなかったものと推測される。さらに、紹従、紹深の兄弟に当たる紹一、紹剛も、孔瓊が兼祧していることがわかる。ただし紹一、紹剛いずれにも「生」の文字は付されておらず、また孔瓊にも「入」字は付いていないので、孔瓊の実の親についての情報は無い。これが単

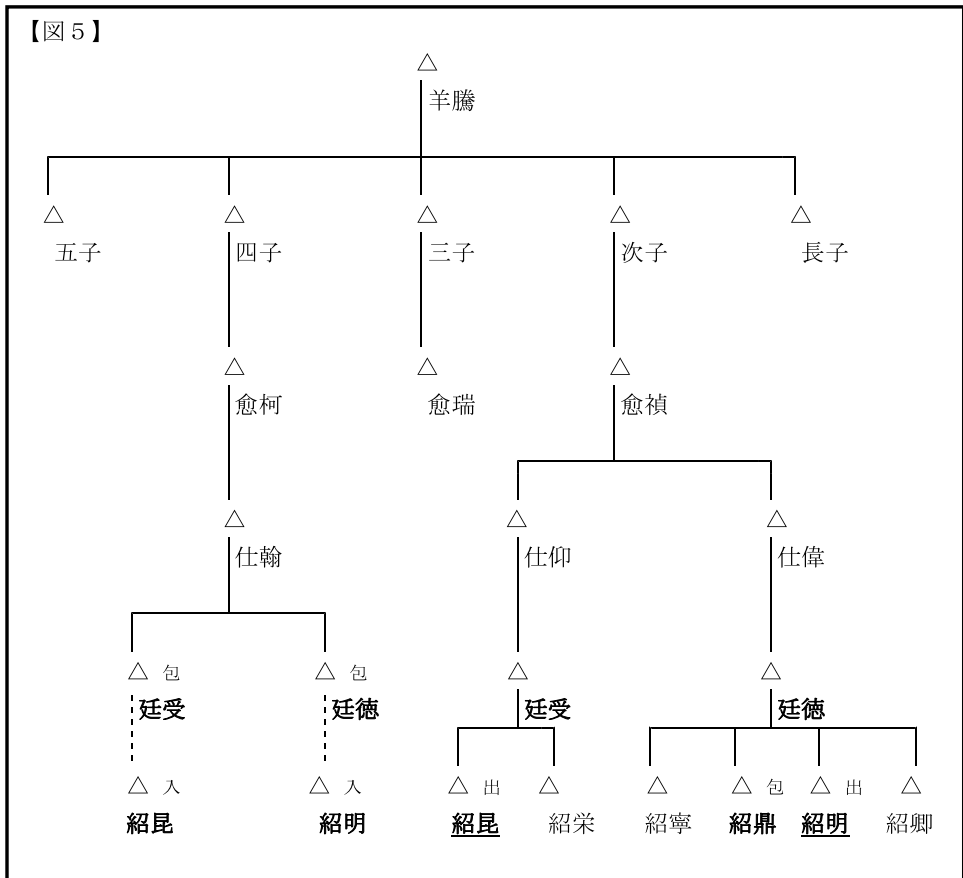
純な記載漏れによるものか、あるいは別個な理由によるものかは不明である。養取と兼祧の関係をみるに、上述の孔上の事例のように兄弟に息子がなく自分に息子が複数いる場合には息子の一人を兄弟の養子とすることもあるが、之莊や孔申の事例のように養子に出すべき余剰分の息子がいない場合には、自分の息子に兄弟の系譜を兼祧させるやり方がとられているものと考えら



れる。

系譜上にはこれら「出」「入」「生」の付記以外に、同じく朱書きによる「包」の字の付記が見られる。この「包」が意味する内容について理解するためには、より複雑な検討が必要である。

たとえば、以下に示す【図5】のケースが「包」の記載を含む例の一つであるが、この場合、仕翰の息子の位置に記載された廷受、廷徳の両名に「包」が付記されている。これら両名は、仕翰の祖父（「四子」）の兄（「次子」）の曾孫の位置にも登場し、それぞれ紹昆・紹栄、紹寧・紹鼎・紹明・紹卿という息子がいたことがわかる。他方、「包」字が付記された仕翰の息子としての廷受、廷徳には、それぞれ紹昆、紹明という息子が一人ずつ記入されているが、彼らにはいずれも「入」字が付されている。つまり、廷受の場合には「次子」の分節の仕仰の息子としての地位を維持したまま仕翰の息子の地位を兼ね、かつ自分の息子のうち紹昆を仕翰の系譜の継承者として養子縁組していることになる。また、同様に廷徳の場合も、仕偉の息子のまま仕翰の息子の地位を兼ね、さらに自分の4子のうちの紹明を仕翰の系譜継承者としている。



この場合の廷受らによる系譜上の2つのポジションの兼務が、上述の【図2】【図3】【図4】の諸事例で示した単純な兼祧と異なるのは、以降両ポジションの系譜を自分の子孫が一括して継承するのではなく、自分の息子のうちの誰が仕翰の系譜を、また誰が仕仰の系譜を継承するかを分別している点にある。つまり、これは廷受ら自身が仕翰の系譜を兼祧したというより、実際には仕翰の系譜に紹昆、紹明らが養取された形に等しいと考えられるが、紹昆らは仕翰の孫の世代に当たっており、息子として養入したことにすれば1世代のズレを生じてしまう。そこで紹昆らの実父である廷受、廷徳が形式上仕翰の息子の位置に記入されることになったものと推測される。

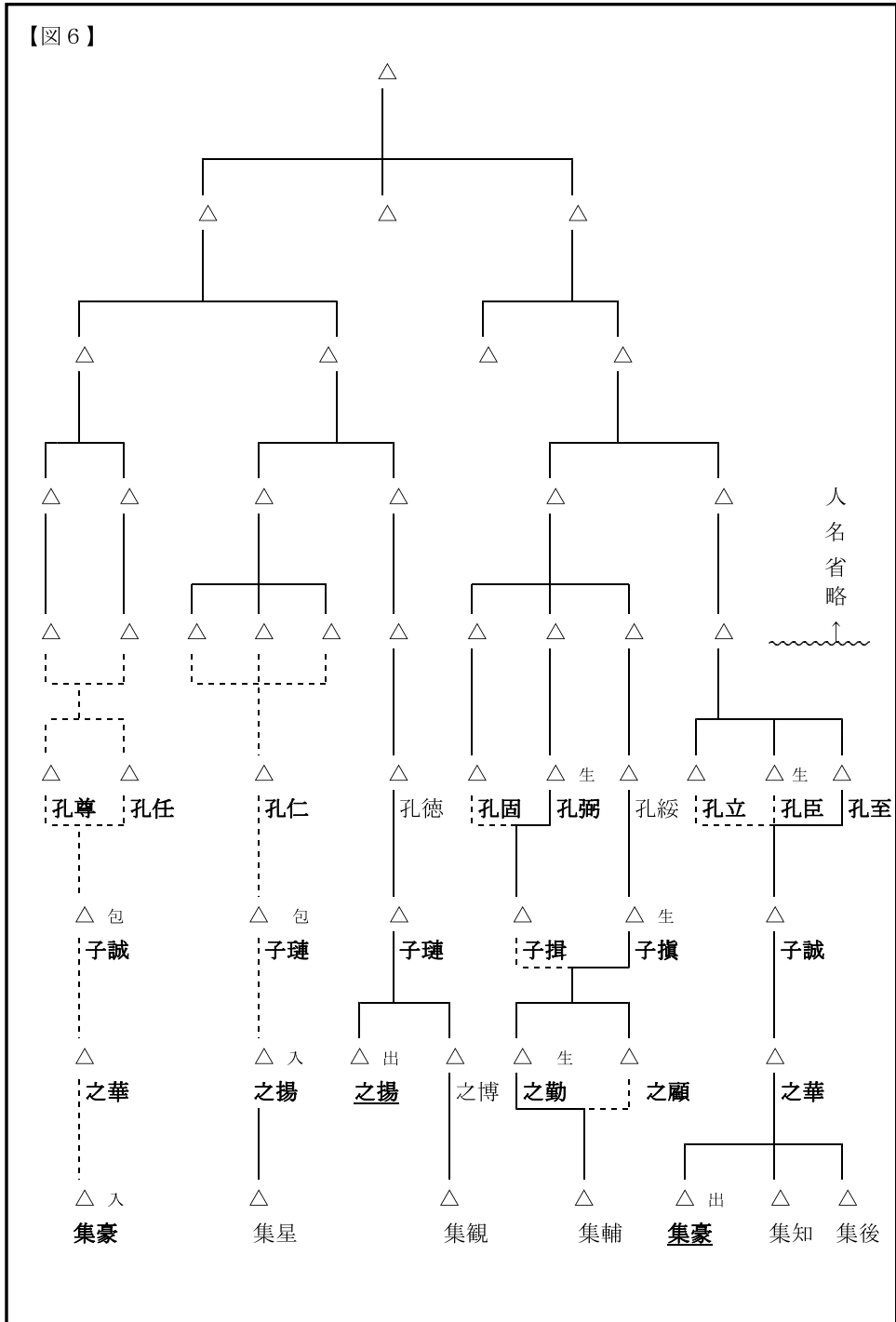
「包」が責任を負う、専有するなどの意味があることから考えて、廷受らがこのように系譜継承の役割の代行を委任されたことを指し示しているものと考えられよう。実際のところこのケースの場合、【図5】に示した羊騰の子孫からなる分節の中で、仕翰が無子に終わったために「四子」の系統が絶えようとしたとき、唯一生存成員の残っている「次子」系統の2つの分節がそれぞれ一人ずつ男子成員を供出して「四子」系統を継承しようとしたものと推測される。

もう一例、「包」の付記されたケースの実例を示すと、次頁【図6】の子璉は孔徳の息子であるが、4代前の祖先でつながった孔仁の息子の位置にも子璉が「包」されている。そして、子の二人の息子のうちの之揚が孔仁の系統に養取されている。また、子誠は孔至の息子でありオジの孔臣、孔立の系統をも兼祧しているが、同時に6代前の祖先でつながった孔尊、孔任両名を兼祧する息子の位置にも「包」されている。そして子誠の3人の孫の中の集豪が孔尊、孔任の系統に養取された形となっている。この場合、養取が子誠の孫の世代で初めて行われたのは、子誠の息子・之華が一人息子であるためと考えられる。

このような養取、兼祧、「包」などによる系譜ポジション間の度重なる個人の移動の結果、系譜は極めて錯綜した形状を示している。他の地域の族譜にも、養取や兼祧についての記録が散見されるものもあるが、この儋州の族譜のように詳細な記録をとどめているものは筆者の知る限りでは極めて異例である。もちろん、この儋州三都鎮顔塘村の羊氏の族譜の場合にも、族内での養取については明示しているものの、他姓からの養取または子供の購入などについては全く言及されていない。こうした行為をこの一族が厳格に禁止していた可能性も否定できないものの、海南島を含む中国南部地域において実際には異姓者の養取や「買仔」の慣行が広く行われていたことから考えて、同一族のみにそうした行為が全くなかったとは考えにくい。系譜記入者が、意図的にそうした行為は記録に残さなかったものと推測される。

いずれにしても、こうした族譜記載のあり方からは、ある程度まで系譜記録の正確さへの意志を読みとることができる。ただし、その場合の系譜記録とは、単に誰が誰の実父であるという父系出自関係の機械的な記録を意味するのではなく、無子の祖先の系譜継承のための兼祧や養入といった二次的な処置を経た、いわば「調整済み」の系譜関係の記録なのである。そこにおいて

追い求められているのは、継承すべき後代がない系譜上の行き止まりが生じるのを極力回避することであり、兄弟・イトコ間または近接する分節間において何らかの仕方で男性子孫を融通し



合うことにより系譜の永続性を保証しようとする努力がなされている。

このような全ての祖先についての系譜永続への努力は、財産相続や地位・名声の継承といった実利的動機付けによってある程度まで説明可能なようにも思われる。少なくともモーリス・フリードマン (M. Freedman) が1950～60年代にモデル化した財産共有主体としての宗族像の中に提示されている合理的な宗族観からは、系譜継承に対するそのような動機付けが導出される [Freedman 1958, 1966]。しかし、上述の諸例を通観してみると、必ずしもそうした理由だけで説明が可能とは思われない。なぜなら、兼祧や養入などの系譜操作によって系譜的連続性保持の操作がなされる対象は、多くが夭折者や貧困者などであり、継承すべき財産や名声を残すような成功者は希であると考えられるからである。あるいは、祭祀を継承する後代がない祖先は災厄をもたらすという世界観上のサンクションによって説明することも可能であるかもしれないが、その点は同地域における祖先観や祖先祭祀儀礼の詳細についての民俗調査を実施していないのでわからない。

少なくとも族譜記録の分析だけから明らかになることは、系譜の永続性への執拗なまでの志向であり、あるいは系譜の断絶を極力回避しようとする強い意志である。そこには、父系の系譜というものについて、滞ることなく祖先から子孫へと流れ続けるべきものであるという一種流体的なモデルの存在を読みとることができよう。

以上のように、系譜の連続性と各祖先の出自上の帰属に関して極めて徹底した志向性をもつ反面、この村話話者グループの族譜は他の地域の族譜の多くが重要な要素として含んでいる諸情報を欠いているか、極めて簡略な形でしか記述していない点にも特色が見られる。それは祖先の生没年、墓所の位置やその風水、生前の業績、ならびに妻の姓や出自、娘の数や嫁ぎ先、といった情報である。

祖先の生没年は多くの族譜において基本的な記載事項となっているが、この羊氏の系図においてはいずれの祖先に関しても生没年に関する情報は皆無である。また、墓所に関する情報も、多くの族譜においては重要な事項となっており、「牒記式」の族譜の中には、ほぼ祖先の生没年と墓所についての記録のみからなり、その実ほとんど埋葬地記録簿といった性格のものさえ見られる。この場合の族譜は、事実上祖先の墓とその祭祀を維持するための備忘録としての機能を果たしている。

子孫の繁栄が祖先の墓地風水により左右されるという信仰は中国南部地域に一般的であり、風水の不適を理由とする改葬や墓地の移動も頻繁に行われてきた。墓地の位置選定ならびに納骨の日時は、そこに葬られる祖先の生没年・月・日・時により決定される。したがって、これらの情報は一連のものであり、祖先祭祀、特に墓地建造とその祭祀にとっては欠かすことのできない情報である。しかし、羊氏の族譜はこうした情報を一切含んでいない。このことは、少なくともこの族譜が墓地祭祀とは直接的な関わりの薄い存在であることを示すとともに、この種の族譜が顕

著にもつ集合的な性格とも結びついているように思われる。

上述のように墓地祭祀に関連する情報を多く含む族譜の場合、それはしばしば各分節によって毎年の墓参や墓地改修などの際に参照すべき資料となる。清明節などの墓参は、通常は族員の記憶によって墓への道がたどられるが、山奥のわかりにくい場所にある墓の場合や数年ぶりに墓参が行われる場合には、族譜にある墓所についての記事が頼りとなることもある。このような用途に族譜が用いられるためには、族譜は墓参の単位となる小分節ごとに分散保有され、かつ必要時に随時参照できるものである必要がある。ところが、この儋州の大型族譜の場合、唯一の原本は宗族全体または村落レベルの主要分節が集合的に保管しており、しかもそれは数十年に一度の改訂時にしか開くことを許されない。したがって、上記のような墓地祭祀のための備忘記録としての用途は果たし得ないものと考えられる。

妻の出身村落や娘の嫁ぎ先まで逐一詳細に記載された族譜というものは他地域でも希有であるが、それでも妻の出身姓だけは多くの族譜にとって必須の記入項目である。すなわち、「牒記式」の文面であろうと「蘇氏式」系図であろうと、各男性祖先には配偶者の存在がその原姓によって「～氏」と付記されるのが常である。しかし、この儋州の大型族譜では、そうした妻の原姓についての表記も一切なく、およそ各祖先に何名の妻がいたか、息子たちは同母兄弟か異母兄弟か、さらにはそもそもその祖先に配偶者がいたか、それとも未婚のまま夭折した祖先なのかさえ弁別できない。

連結線で示される系譜関係および「出」「入」「包」等で付記される養取、兼祧についての情報以外で、この儋州の大型族譜に書き込まれている唯一の情報、顕著な業績を残した祖先への簡単な添え書きである。すなわち、「国学生」「国学進士」「登仕郎」「恩賜修職郎」「儒林六品軍功」など科挙タイトルまたは任官に関わる名誉についての注記であり、近代以降の祖先については「師範学校卒業」などという注記もある。しかし、他の地域の族譜、特に「牒記式」の族譜の場合、こうした「顕祖」についての記述はしばしば華美で冗長なものとなる傾向があるのに対し、この儋州の族譜では上記のようにきわめて簡潔に付記されるのみである。

このように、儋州の大型族譜は祖先の系譜関係の正確な記録という機能に特化している点で他地域の族譜と性格の違いが認められ、その結果、各祖先についての系譜継承者を特定し、養取・兼祧等を逐一明示している点においてより厳密さをともなったものとなっている。しかし、それと同時に他地域の族譜において多くの族譜が主要な記載項目としている墓地祭祀関連情報や、祖先の業績、配偶者等に関する情報が欠落または極端に簡素化された形態となっている。

儋州市地域の村話話者グループの保持する特殊な巨大一枚布族譜の系譜記述様式に関する分析からは、以上のような特色が指摘できるが、同種の族譜のもう一つの著しい特色は、族員自身が数十年に一度の改訂の機会にしか開封・参照することができないという点にもある。このような日常的なアクセスの否定は、改竄の防止による系譜の真正性保持にとって有効であると考えら

れる反面、族譜を媒介とした族員間での知識の共有には貢献し得ないであろう。しかし、「開譜」の機会を数十年に一度、つまり多くの族員たちにとって一生に一度限りのものとし、系譜情報の詳細を「秘された真実」ととどめおくことは、系譜情報自体の儀礼的ないし精神的な価値を高めることに寄与していたものと推測される。この点においても、村話話者グループの保持する大型族譜は、系譜知識の公開と共有を意図した印刷族譜とは対極的な性格のものである。

3. 他方の極としての宗親会の宗譜

上記においては、非印刷型族譜のひとつの究極的な形態として海南省儋州市地域の村話話者グループの大型族譜を取り上げたが、この節では、その対極的形態とも言える現代の宗親会活動の一環として編まれる宗譜について分析する。

筆者はすでに、前稿〔瀬川 2004a〕において族譜を手書き少数数型のものと印刷多部数型のものに区分し、前者があらかじめ限られた範囲の人々が祖先との関わりを維持しようとする意図のもとに作成されるのに対し、後者はより広範な人々の間に新たな共通意識と社会関係を創出しようとする意図のもとに編纂されるものであるとして、両者の社会的機能の相違を指摘した。そして、その中で宗親会の編む宗譜を、後者の性格を示すものとして位置づけた。ここでは、その後の実地調査の中で新たに収集することのできた宗親会編纂の宗譜ないしそれに類似の機能を有する出版物について紹介しつつ、その基本的特色を分析してゆく。

まず最初に取り上げるのは、海南省儋州市地域で2003年に入手した『儋州市符氏志（初版）』である。同文書はその名称が示すとおり、「族譜」または「宗譜」等と銘打ったものではないが、その内容は同地域に暮らす符姓の人々の共通祖先の系譜をつまびらかにし、また地域内の宗親の居住村落、人口等を明らかにし、さらには歴史上における符姓の先人の功績を称揚することを目的としている点で、「族譜」としての内実と機能を具備したものとすることができる。

同文書は、「儋州市符氏志編委会」により1997年4月に発行されたものである。「后記」によれば、発行までの経緯は以下の3段階を経た。まず、1988年に海南符氏大厦の落成式が行われ、その際に符忠以下9名の族員が符姓の起源ならびに儋州符氏の源流に関する調査を行い、『儋州市符氏志』（初稿）を編纂した。続いて、1991年には、符志強ら3名がこの「初稿」に対する検討を行い、一部に混乱や不明瞭な箇所があること、特に和慶、蘭洋等地区的符氏の源流についての資料が欠落していることなどを指摘した。そしてこれらの不備を補充する作業を行った後、符忠以下10名の族員が、「初稿」の改訂版編集にとりかかり、1993年に「第二稿」を完成した。これらの作業を受け、1994年に符兆升ら5名が印刷出版に取りかかり、1997年に刊行に至ったという。

海南符氏大厦は省都・海口市の新民東路にあり、海南省全域の符姓が組織する宗親会の本部として、海外在住成員などの寄付を集めて建設されたものである。このような宗親会組織の活動の

刺激を受けてその地方支部が宗譜の編纂事業を行うのは、前稿〔瀬川 2004a〕で取り上げた海南省臨高県の王姓の場合とも共通している。王姓の場合にも、1989年に海南省全体の王氏聯宜会が結成され、それに呼応して1992年には臨高県独自の分会組織ができている。そして宗譜の編纂のための資料収集が1993年から始まり、1995年に首巻を出版したのを皮切りに、1998年までに計10巻の宗譜を刊行している。このことから考えて、海南島全域にわたって1980年代末から宗親会活動の活性化、そして1990年代に入ってから宗譜編纂の盛り上がりが生じたことが推測される(注1)。

『儋州市符氏志(初版)』は簡体字横書きの印刷製本版である。内容は、まず「前言」において儋州地域の符姓の祖先の系譜概略と同資料の編纂意義ならびに編纂の方針について簡述し、また海南省全体の符姓子孫が以後使用するべき「新派序」すなわち新しい輩字の表が掲げられている。そして本編の第一部「社会沿革中における符氏各世代」においては、符氏の起源、海南島来住以前の符氏の歴史概略、海南島居住以降の祖先の歴史概略を記述し、簡略な系図と宗祠の碑文の写し、そして儋州始祖までの各代祖先および儋州居住以降の主要祖先についての簡略な記事が収められている。さらに、儋州市内の符姓が居住している村落や郷鎮の名称と、そこに居住する符姓の戸数と人口を列挙したリストを付している。

第二部「国家・民族に重大な貢献をなした儋州符氏各世代」では、まず清代以前の各代の進士、拳人、将軍、貢生、廩生等を出身村落名付きで列挙し、著名文人や官僚等の事績を略述している。また、それと並んで明代弘治年間に反乱拳兵した符南蛇という人物についての伝記も載せている。さらに、辛亥革命、抗日戦争、および国共内戦時に犠牲となった「烈士」の出身村落名付きリスト、中華人民共和国建国前後に活躍した政治家、軍人、役人等の出身村落別リスト、中華民国時代の著名人士の出身村落名付きリスト、歴代の族員の手による対聯、詩、文集などの文芸、「四代同堂」等を実現した長寿者のリストが掲載されている。

第一部に記載された祖先の系譜に関わる部分では、儋州市の符姓の起源について以下のように説明されている。まず、符姓の起源は戦国魯国の頃公の孫・雅が符を姓としたことに始まり、後代41世の繩武が宋代に福建の莆田県令となって同地に移り住んだ。その繩武の息子の有辰は宋朝の武略進士となり、仁宗天聖3年(1025年)に「撫黎」のため海南島に渡って文昌に住み、海南始祖となった。この海南始祖6代目の安会が文昌から儋耳(今日の儋州)に移住し、儋耳一世祖となった。今日の儋州地区在住の符姓の多くは、この安会の後裔であるとし、安会の開基したとされる三都鎮南源村の大型一枚布族譜(宣統元年修訂)の写真も掲載されている。

しかし、儋州市内には、特に和慶鎮、蘭洋鎮、南豊鎮、番加鎮など東南部地域の符姓を中心に、この安会の後裔とは別系統の符姓がいるとしており、それらの人々は北宋開宝年間(968～976年)に福建省閩県から海南島の澄邁県に移住した符盟の子孫だとしている。そして、盟の15代めの源が臨高に移住し、その後その子孫が臨高の各地に広がったとしている(注2)。

このように、系譜的には異なる2系統があることを認めつつも、今日の儋州市内居住の符姓は

いずれも宋代の渡瓊始祖（海南島に渡った最初の祖先）に始まる「符氏の一家」だとし、その一体性を強調している。祖先が福建、特に莆田から海南島に来住したという伝承は海南島漢族のメジャーな方言集団である海南話話者グループに広く見られる伝承である。儋州地域の村話話者の場合、少なくともその方言が粵語系統だとされることから考えると、祖先の福建来住説は必ずしも史実を反映したものではなく、海南話話者グループからの伝播・借用によるものとも推測されるが（注3）、宗親会組織は両系統の符姓渡瓊始祖がいずれも福建から来たとされることを重視し、その一体性を強調しているのである。

同じく第一部に収録された市内の符姓居住村落および戸数・人口リストでは、全市の364ヶ村に10,344戸、62,102人の符姓が住んでいるとしている。中でも特にまとまった戸数が住んでいる集落は、三都鎮の南源村（320戸、1,900人）、那烟村（350戸、2,020人）の2村である。しかし、符姓の居住する村落は蘭洋等東南部も含む市内の全ての郷鎮にくまなく及んでいる。

第二部について特筆すべきことのひとつは、清代以前の進士や拳人等の功名たちと並んで、明代に反乱の首領となった符南蛇を取り上げ、特に紙数を割いてその功績を称揚している点である。この符南蛇について『儋州市符氏志（初版）』は、「民族英雄」と述べるだけでその籍貫や系譜について触れていないが、地方志等によればこの反乱はリー族の反乱であったとされる点が注目される（注4）。

実際、少なくとも儋州市地域においては符姓はリー族にも多く見られる姓であり、同地域のリー族の主要な姓のひとつとなっている。特に蘭洋、番加といった東南部地域にはリー族籍の人々が多く居住している。『儋州市符氏志（初版）』はそこに含まれる符姓の人々の民族籍については一切言及していないが、符姓の宗親会が漢族とリー族とにまたがって形成されていることは明らかである。このように、宗親会組織が海南省内の漢族の方言グループの相違や民族の相違を超えた連帯を作り出す作用を果たしていることは注目に値しよう。

『儋州市符氏志（初版）』の第二部についても一つ注目すべき点は、民国期の国民党系の著名人物に関して紙幅を割いて言及している点である。辛亥革命期および中華人民共和国成立後の著名人物リストに比較すれば人数も少なく控えめな表記ではあるが、削除されずに記載されている。リスト中に登場する符別瑕（中央陸軍軍官学校に軍官として在職）の場合、現在は台湾に居住して台北市符氏宗親会理事を努めている。『儋州市符氏志』の巻頭にこの符別瑕の題字が掲載されているところから察すると、その編纂事業にも寄与した人物と考えられる。前稿〔瀬川2004a〕で述べた臨高県の王姓宗親会の宗譜編纂事業でも、台湾からの高額寄付者が見られたことからして、この『儋州市符氏志』の編纂にも台湾からの物理的、精神的寄与がかかわっている可能性が高い。国民党時代の記事を排除しなかった理由は、このあたりにあるものと推測される。

『儋州市符氏志（初版）』の編者は、その序言の中で同文書の「特殊」な性格について注意深く次のように書くことによって、読者に注意を喚起することを怠らない。

本『志』内の符南蛇の神話伝説にも近似する断片的記述など、一部の事例は、現代の科学的見解とは合致しないものである。しかし、ここに記載したのは史料であって科学的な論証ではなく、それゆえこうした部分は削除せぬまま残してある。その是非については、読者が判断されたい。

……『志』を書くことの難しさ、それは事実上人について書くことの難しさである。歴史のありのままの状況を映し出すため、時代の影響を受けた一部の人々についても、本『志』の内に書き入れることが必要であった。それらの人々が社会の前進の中でいかなる作用を引き起こしたかについては、符氏の諸兄弟による判別と評価を待ちたい。

このように歴史資料としての客観性を重んじるという立場から、非科学的な伝承や「反動的」人物についての記述も排除しないことを断っている。

この『儋州市符氏志（初版）』がどれだけの部数印刷されたのかは不明である。しかし、多部数が同時に量産され、市内外居住の族員の間にも広く配布されたことは明らかである。それは、前節で検討した一枚布の大型族譜とは極めて対照的な性格をもち、情報の一般への公開と共有を目的としている。後者における系譜情報の詳細についての秘匿性とは対照的に、地域一帯に居住する多様な系統の符姓成員が渡瓊始祖についての系譜知識と歴史とを共有することを目指している。また、系譜情報以外の多様な情報に富んでいる点も特色であり、特に著名人物についての伝記・評伝としての性格が強い。この点は臨高県の王姓の宗譜にも共通してみられた点であり、この種の族譜にさながら「姓氏別人物辞典」とでも呼ぶべき性格を付与している。

注目すべきは、このような対極的な性格をもつ族譜が、同じ地域の同じ人々の間に同時代的に保有されている点である。すなわち、『儋州市符氏志』の編纂主体となった儋州市在住の人々のうち、少なくとも村話話者の人々の多くは自らの村落において宗族の一枚布式大型族譜を維持しており、『儋州市符氏志』の編纂過程においても、南源村のそれのように母村格の村落の族譜は直接の典拠資料となっている。村話話者の住民は、一方において村落をベースとした宗族内の次元において系譜知識の機密性と儀礼性を色濃くとどめた大型一枚族譜の保有を維持しながら、同時に他方では、外部への広い連帯と知識の共有を目指した宗親会の宗譜編纂にも関与しているのである。

以上は、海南省の儋州市地域の宗親会に編纂された現代版の宗譜の事例であったが、同じく現代的な宗親会の宗譜編纂活動の事例として、次に中国本土広東省の南雄珠璣巷を中心とする広東本地人の黎姓の場合を検討する。

宗親会と言えば、かつては海外や香港などの華僑・華人社会に特徴的に見られる社会団体であ

るとの認識が強かったが、中国本土社会でも、以前から都市部を中心に存在していた。その淵源は清代に地方拠点都市に形成された合族祠、すなわち地域内各地の同姓諸宗族が出資し合って建設した当該姓の共通祖先を祭祀する施設に求められるという指摘もある。20世紀半ば以降、宗親会は香港などを結節点に世界的な横のつながりを深め、東南アジア、アメリカ、中国本土などの各地の同姓の宗親会を連結した組織へと発展する現象が見られた。

1990年代以降、海外や香港の宗親会組織はその中枢会員世代の老齢化やホスト社会の変成にもなっており、その性格と活動力自体に変化を来しつつあるようにも見えるが、改革開放政策の定着と香港の中国復帰の以後、中国本土での宗親会活動はむしろ活性化をたどっているとの印象を受ける。特に広東省は、香港に近接すること、欧米・東南アジア華僑・華人の主要な母村地域であること、そして華南経済圏の中核として経済発展が著しいこともあって、この傾向は特に顕著である。

こうした広東本地人系の宗親会組織が、彼らの伝承上の故地である広東省南雄市珠璣巷に各姓の祠堂を中心とした一大歴史公園を建設したことについては、すでに拙著 [瀬川 2004b] の中で注目し、その社会背景と文化的な意味の分析を試みている。ここでは、この南雄珠璣巷における宗祠建設活動にともなって黎氏宗親会が1998年11月に発行した『黎氏会刊』を材料として、こうした現代的な宗親会活動が生み出す新しい「族譜」の形態について考察する。

南雄珠璣巷における黎姓の宗祠は、1995年に当時広州市長であった黎子流および香港の黎氏宗親会の発起により建設が計画され、3年後の1998年11月に完成した。落成の式典では、アメリカ、カナダ、オーストラリア、シンガポール、マレーシア、ドミニカ、香港、台湾、マカオ在住の宗親1,300人ならびに中国国内の陝西省、江西省、広東省等各地の「四千余郷」の代表が列席して「世界黎氏后裔第一屆懇親大会」が開かれたという。『黎氏会刊』はこの際に発行された記念刊行物で、香港黎氏宗親会有限公司が出版者となり、参加各宗親に無料配布されたものである。(印刷部数は不明。)



『黎氏会刊』

一般に「会刊」は宗親会に限らずこうした団体組織が定期・不定期に発行する刊行物を指し、性格・内容は多様である。しかし、この『黎氏会刊』の場合には、宗祠落成の特刊として編まれたことから、祖先の系譜を明らかにし先人の遺徳を称揚するという族譜としての性格が顕著である。同『会刊』の目次は以下のとおりである（括弧内の数字は筆者が便宜的に付したもの）。

- (1) 落成式典準備委員会委員名簿
- (2) 発刊の詞、題詞、賀詞
- (3) 黎氏族源の概説、湖南省酃県の黎氏族譜記載の1～97世の黎氏上代祖先の系図ならびにその牒記式記事、各地の主要族譜間の上代祖先名の対照表、上代から現代に至る著名祖先についての記事、聖諭・家規・源流歌
- (4) 珠璣巷宗祠建設の経緯説明、建設過程の写真紹介、寄付者名簿
- (5) 江・黎・何三姓同根および聯宗組織に関する解説、江氏・何氏著名人の紹介（注5）
- (6) 清代～現代の黎姓著名人についての紹介論文10篇
- (7) 香港黎氏宗親会の沿革の紹介
- (8) 宗親会47周年・48周年記念集会の写真
- (9) 広東開基祖とされる黎鵬とその家系についての解説記事
- (10) 1998年6月29日の広東省中部での水害に対する宗親会等の義捐活動記事
- (11) 族員起草による香港と中国の繁栄を祈念する詩・小論
- (12) 南雄珠璣巷故事の紹介、珠江デルタ地域各宗族の珠璣巷からの移住記事、番禺大朗（注6）黎氏族譜記載の広州合族祠に安置されていた位牌のリスト、番禺沙湾黎氏族譜記載の珠江デルター円の黎氏宗族リスト、現在の珠璣巷及び南雄市の写真
- (13) 黎姓出身の画家による山水や花鳥画
- (14) 会員関連企業等による広告

珠璣巷の伝承をもつ黎氏は、珠江デルタ周辺に住む広東本地人の諸宗族ならびにそこを出身地とする香港や海外在住者であり、珠璣巷での宗祠建設事業に積極的に関わった人々もこうした出身の人々であったものと推測される。しかし、『黎氏会刊』の巻首部分を飾る上代祖先の系譜は、湖南省酃県の同姓宗族が編んだ族譜に依拠しており、さらに江西省南安県、広東省南雄聞韶、広東省興寧下藍、江西省尋鄔県の黎氏の族譜からその上代祖先名を列挙して比較している。

湖南省酃県の黎氏の族譜と思われるものは、その上代部分について木版本の族譜がそのまま複写掲載されている。系図の部分はほぼ「蘇氏式」の表格となっており、後続する各祖先についての記事は簡潔な「牒記式」記載である。その系譜記述に従えば、黎姓の淵源は黄帝の4代子孫の祝融に求められ、祝融の別名が黎であったことからこれを姓にしたとし、祝融の数代後の子孫・文魁を「一世」としている。その後、前漢代に第52世の季が広東興寧に遷居したとあるが、宋代には第86世の襯が福建の汀州府上杭に開基したとなっており、また2代後の第88世・廷昌が江西の寧都県東韶に移居したことが記されている。そこからさらに湖南省酃県への移住時期については所収部分の系譜には書かれていない。

しかし、いずれにしてもこの系譜は『黎氏会刊』の後半部分（9）で登場する珠江デルタ方面

の広東本地人の黎氏によって「広東始祖」とされている黎鵬（号・待拳）には連続していない。(9) 部分の記事では、黎鵬は江西省雲都県水頭里の出身で、北宋隆興2年（1023年）に科挙に及第し、後に広東省南雄に移り、さらに珠江デルタ地域の新会県古崗州に移って近くの鳳凰山に葬られたとある。(12) 所収の、かつて広州永漢路にあったとされる黎氏の合族祠の位牌リストを見ても、始祖としてこの黎鵬（待拳）が祀られていることから、珠江デルタ一円の広東本地人系黎氏の間では清末までにはこの黎鵬を広東始祖とする系譜が合意されていたものと考えられる。にもかかわらず、『黎氏会刊』がこれには直接連続しない湖南省酃県の族譜を巻頭に引用している理由が注目される。

上述の(3)(9)(12)の部分を含め、祖先の系譜に関する資料ならびに考察に関しては「黎氏資料室」の文責となっているが、こうした宗親会における上代の系譜調査作業は、珠璣巷の宗祠建設が始まる以前の香港での宗親会活動の中ですでに着手されていたものと推測される。そうした活動の中では、珠江デルタ地域の黎氏宗族の始祖だけに限定されない全中国の黎姓の起源を明らかにするべく、できるだけ上代の系譜記録を含む族譜が探索されたはずである。香港の宗親会に湖南省酃県の黎氏宗族の出身者がいたのか、あるいは図書館等に所蔵されている族譜文献の中からたまたま同族譜が検索されたのかは不明であるが、こうした意図によってこの湖南省の族譜記事が引用されることになったものと推測される。

興味深いのは、(3)の中で湖南省酃県の族譜との対比資料として引用されている江西省南安県、広東省南雄聞韶、広東省興寧下藍、江西省尋鄔県等の族譜は、いずれもその地理的位置から推察して客家系の宗族のものと考えられる点である。これに対し、新会や番禺など珠江デルタ地域の広東本地人系の族譜はここには引用されていない。広東本地人系宗族の族譜は、多くが広東開基始祖以下の系譜のみを記述しており、より上代の系譜情報については触れることが少ない。これに対し、客家系の族譜は古代における姓の起源から始まり、延々と現代までの系譜を書き連ねる傾向にある。宗親会がより包括的で上代祖先にまで溯る系譜の探索を指向したとき、おのずから典拠とするべき族譜は客家系のそれに行き着いたものと考えられる。

(3)の冒頭に掲載された黎氏源流に関するまとめの中で、「資料室」の執筆担当者は黄帝から漢代に広東興寧へ遷居した黎季までの系譜を概略に述べた後、「……季公が広東に入って後今に至るまで二千余年の歴史がある。その間、西へ東へと移住が繰り返され、子孫は天下に繁殖したが、早期には江西省の臨川・吉安・南康、湖南等の地へ移る者が多かった。後には、江西・湖南一帯から大嶺を越えて粵北の南雄珠璣巷に入り、宋末には戦乱と胡妃失踪の事件を避けて、族人は少しずつ広東省全域ならびに海外にまで移住していった。……」と述べるにとどめ、湖南、江西方面の族譜による上代の系譜と珠璣巷伝承以降の広東諸地域の黎氏の系譜との関連については、きわめて漠然とした解釈にとどめている。

このような南雄珠璣巷を拠点とする黎姓の宗親会の刊行した『黎氏会刊』は、現生成員までつ

ながる系譜の連続性、一貫性よりも、はるか古代における姓の起源や上代祖先の名声を共有することに重きを置き、それによって多様な系統の宗親の連帯を作り出すことを目指している。また、そこには海南省儋州市の符姓宗親会の『儋州市符氏志（初版）』や、臨高県の王姓宗親会の『臨高王氏宗譜』と同様、単なる祖先の系譜情報以外の雑多な項目を含み、特に同姓者の中の著名人物や歴史的功労者についての記述を重視している。こうした意味で、前節で検討した村話話者系宗族の大型一枚族譜のようなタイプの族譜とは、非常に対極的な性質を示すものであると言える。

4. 現代の族譜編纂事業と宗族復興

以上において、海南省儋州市の村話話者系宗族にみられる大型族譜と、海南省や広東省の宗親会が編纂した新タイプの族譜という、対極的な性格を示す族譜の比較を行ってきた。この節では、これらの比較を踏まえつつ、現代における宗族復興現象ならびに族譜編纂事業について総合的に考察する。ここで検討する事例は、2004年11月に行った広東省佛山市順徳区での調査により得られたものである。

順徳は広州から南南西約15キロほどに位置し、珠江デルタ地域の中でも特に豊かな地域として知られている。全域にわたって水稲耕作や淡水魚養殖に適した水郷地帯が広がり、また清代から民国期にかけては養蚕業も盛んであった。こうした高い生産性を背景に、清末には大規模な宗族が多数発達したことで知られている。広東では「順徳祠堂、南海廟」という言い回しがあり、すなわち順徳県には豪華な祠堂が、また北隣の南海県には豪華な廟がたくさんあることを表している。清代の宗族組織の発達が他地域に比して顕著であったとされる広東省の中でも、それだけ順徳の宗族発達は突出したものであった。

このような宗族発達地域であった順徳でも、中華人民共和国成立後、1950年代の土地改革と1960年代の「四旧打破」運動や文化大革命を通じ、宗族は地主勢力の隠れ蓑であり封建的な遺物であるとして徹底的な批判と解体の対象となった。この結果、他地域におけるのと同様、この地域でも祠堂は破壊されたり他の用途に転用され、祖先の位牌は廃棄され、族譜は焼かれ、祖先の墓は整地されて耕地となった。その後、1980年代に入って改革開放政策が軌道に乗り始めると、各地では宗族の復興現象が生じ、祠堂の再建、族譜の再編、祖先祭祀儀礼の復活が見られるようになったことは前述のとおりである。

順徳は清代から広東省の中では比較的豊かな地域として知られてきたが、改革開放政策以降、香港や深圳の経済的刺激も受けつつ、珠江三角洲経済開発区の一部として特にめざましい発展を遂げた。車、電気製品、建築資材、家具など多様な工業が立地しており、すでに幹線道路沿いの郷鎮はこうした産業の生産基地で埋め尽くされている。こうした地域経済状況の変化にともない、周囲の農村部でも住民は土地を賃して一種の地主と化し、実際の耕作は省内外の相対的に貧しい地域からの流入人口によって担われつつある。この結果、順徳を含む佛山市全域では、そこに本

籍を有する住民に関し、2004年1月から農村戸籍と都市戸籍の区別を撤廃するという先進的な改革も実施されている。

順徳区内の各郷鎮の年間財政収入を見ても、容桂鎮の5億8,837万元を筆頭に、倫敦鎮の4億5,000万元、陳村鎮の4億4,425万元など、非常に高い水準にある〔国家統計局農村社会経済調査総隊・編 2003: 724〕(注7)。こうした経済的発展が、宗族の復興現象にどのような影響を与えているかを理解することが、今回の調査の主目的であった。

しかし、実際に調査をしてみると、同地域のこのような経済発展が宗族復興に必ずしも直接のプラス作用をもたらしているわけではないことが判明した。広東省海豊県や海南省儋州市において、香港などに在住する族員からの寄付や、最近の地域経済の好況を背景とした地元住民の寄付により、次々と祠堂が復興し、族譜の修訂も手がけられていることは、前稿〔瀬川 2004a〕において示したとおりである。順徳の宗族の場合にも、香港等で成功した族員は多く、また上述のように地域経済の発展ぶりは他地域を大きく凌駕するものがある。しかし、必ずしもそうした状況が宗族復興事業へと直結していない。

たとえば、区の南西部にある杏壇鎮古朗村伍氏の例を見よう。この村は周囲や集落内にも多くの水路が横切る水郷地帯にあり、伍氏一族は、約3,800人からなる古朗の村落群の7～8割を占めている。その始祖は宋代に開封から移住してきたと称している。杏壇鎮は県城の大良など区の西部を通る幹線道路に沿っていないため、工場などの立地も相対的に少なく、住民の言葉を借りれば「順徳のシベリア」という後発意識を有しているが、中国全体の農村の中で考えれば決して貧困な農村ではない。伍氏一族は清末には大規模な宗族組織を作り上げており、現在でも宗祠をはじめ多くの分節の祠堂の建築物が残存するが、いずれも廃墟と化している。多くは1950年代または1960年代に学校、倉庫等に転用され、位牌などは全て撤去された。改革開放政策開始以後になっても、祠堂再建の計画は生ぜず、村内には祠堂から外されたままの石碑などが地面の上に放置されている。

この古朗村伍氏には族譜『伍肇基堂族譜』があるが、それは光緒9年編の全10巻からなる木版本である。内容は、首巻が序文、人物志、歴代祖先の世系表、祖祠・祖墓の図面、祭文、重要祖先の墓誌等からなり、また第2巻は上代祖の系図、そして第3巻から10巻までは各分節の系譜記録である。系譜は、それぞれの巻の冒頭部分に「蘇氏式」の系図が掲げられ、その後に各代祖先についての「牒記式」の記述が続く。各巻の最初の頁には「天字第玖號」の印が押してあり、版元を示す印と推測される。天字は広州市の珠江に面した埠頭の名称であり、同地の版元で印刷されたものと考えられる。村内に族譜は4部のみ現存するといい、虫害の跡などあって保存状態はよくない。なお、広州市の孫中山図書館にも同族譜が一セット保存されていることが、同図書館の目録から確認できる。

このように完備した族譜が現存しながら、現在までのところ、それを修訂して新たに族譜を発

行しようという動きは見られない。族譜を保管している老人によれば、可能ならばそうしたいが十分な財政的支援をしてくれる人が見つからないという。

同じく、順徳区北部の樂従鎮の沙濠村の陳氏一族においても、かつての大規模宗族の村でありながら宗族復興への機運が欠落した状況が見いだされる。樂従鎮は区の北西端に位置して佛山市街や広州にも近接し、近年では家具生産の一大拠点として広く内外に知られる場所となった。沙濠村は鎮の中心からほど遠くない集落で、8,000人の人口のうちの大部分が陳姓である。

集落の前面に建つ巨大な「陳氏大宗祠」(本仁堂)は、清末光緒26年(1900年)の創建で、4,000平方メートルの敷地面積を誇るその全体規模や屋根・柱、それに現在も残る一部の木彫の装飾などを見てもきわめて壮麗な祠堂であったことが忍ばれる。しかし、1950年代にこの宗祠も小学校に転用されるに至り、内部は改装され、位牌等も撤去された。その後、小学校は隣接する用地に移転したが、宗祠は改修されることなく、古い学習机や椅子などが放置されたままの状態となっている。村の住民が参加する端午節の龍舟競渡の船の置き場や、村民の集会場所として現在も使用されているものの、祠堂としての機能は失われたままである。

順徳の政府は、1991年にこの宗祠を保護文物建築に指定し、また1999年には祠堂前にその由来を記した石碑を建てて保存の意志を示しているが、内部を修復するだけの財源は集まらず、放置された状態である。象徴的であったのは、筆者が調査に訪れる半月ほど前、同村出身の日本華僑がこの宗祠を訪問したといい、宗祠の奥の位牌のない祭壇には、その日本華僑が手向けていった花束だけが置かれてあった(注8)。

このように、清代には宗族の特に発達した地域として知られ、また現在は経済的先進地のひとつである順徳において、宗族の復興が必ずしも顕著でない原因としては、いくつかのものが推測できる。第1に、民国期まで大規模宗族が特に支配的であった地域だけに、土地改革その他の社会主義的諸改革の中で宗族が批判の対象となる度合いも大きく、したがって地域住民の歴史的記憶の中で未だに宗族に対する負の評価が払拭し切れていないことが考えられる。また第2に、もともと存在した宗族の規模が大きく、復興事業を行おうとしても全体の合意を形成することが難しいという理由も考えられよう。さらに、産業立地の条件に恵まれた同地域では、富裕な個人や団体が資財を投ずるべき選択肢も多様に存在し、他のもっと農村的な社会環境の残る地域のように宗族復興への資金集中が生じにくいという要因も考えられる。

しかし、同じ順徳においても、すべての宗族が衰退したままであるわけではない。一部には復興活動に対し積極的な宗族も見られる。たとえば、同じ樂従鎮の鷺洲村の黎氏一族の場合、祠堂の修復など宗族復興の活動に積極的に取り組んでいる。同村の人口は3,000人強で、その中の7～8割は黎姓であるという。集落の中央にある祠堂は、明代隆慶年間創建のものとされ、清末宣統元年まで数次にわたり重修されている。しかし、やはり1950年代には学校として転用され、内部は荒廃した。その後、村内の各分節住民や、村出身の香港居住者から寄付を募り、2001年に祠

堂修復を達成した。一度は破棄された祖先の位牌も立派に作り直され、祠堂内の木彫装飾なども往時のものに復元している。



順徳区樂從鎮鷺洲村黎氏の祠堂

実は、この鷺洲黎氏一族は珠璣巷の宗祠建設活動にも参加しており、1998年の宗祠落成の式典にも宗族代表が参加し、前節で言及した黎姓の宗親会発刊の『黎氏会刊』をも保有している。鷺洲黎氏一族には族譜はないのかとの質問に対し、宗族の老人が取り出してきたのがこの『黎氏会刊』をはじめとする黎姓の宗親会の刊行物であった。このように、同じ順徳区内においても、珠璣巷の宗祠を中心とする広域的宗親会ネ

ットワークに参加した宗族は、宗族復興活動に積極的に取り組んでいる点が注目される。

かつて1960年代1970年代に欧米の社会人類学者を中心とした宗族研究が香港、台湾を舞台として展開された時期には、リネージ (lineage) としての宗族と、クラン・アソシエーション (clan association) としての宗親会との間に、社会組織としての異質性が強調される傾向があった。古典的な親族研究の枠組みにおいては、リネージは真正の親族関係に依拠した一次的社会集団であり、それに対してクラン・アソシエーションの方は擬制的な親族関係に依拠して二次的に形成されたボランティア・アソシエーション的な性格の強いものとして対比されたのである。特にモーリス・フリードマン (M. Freedman) の確立した宗族研究 [Freedman 1958, 1966] においては、農村的な社会組織として農地等の生活資源を共同保有する団体である宗族と、都市の移民社会において移民たちの集合が親睦・慈善を目的に形成する宗親会とは、根本的に性格の異なる存在として認識された。そして、フリードマン自身やそれに続くフィールドワーカーたちが香港社会の中で主たる研究対象としたのは、都市の移民たちの形成する宗親会ではなく、香港新界の原居民集落に残存している真正の宗族組織であった。

今日、改革開放政策以降の新たな中国本土社会の変化の中で続々と生起しつつある宗族復興の諸活動は、このような宗族／宗親会間の断絶や異質性よりも、むしろ両者の連続性あるいは連動性を映し出しているように見える。香港をはじめとする外部社会との往来の活発化、地元経済の活性化等の展開は、両者の結びつきを一層密なるものにしつつある。そして、それに呼応して、各地の宗族や宗親団体が編み出す族譜も、より一層多様な体裁と用途をもつものとなりつつあるのである。

注

- (1) もっとも、筆者が海南省三亜市で収集した海南省黎氏宗親会編纂の宗譜は1985年、また斐氏宗親会が編集した斐氏の宗譜は1986年に刊行されたものであったので、先行的な姓においては80年代半ばからこうした活動は始まっていたものと考えられる。
- (2) 那大や和慶、蘭洋などを含む儋州市南東部は、かつて臨高県に属していたが、1950年代に儋州市（当時は儋県）に帰属替えとなり、儋県の県城が県の中部から那大へ移された。今日でも、この地域では臨高とのつながりが比較的強く、臨高方言が一部通じる。
- (3) 牧野巽は海南島の海南話話者の間に広く流布した福建省莆田県甘蔗村起源伝説に注目し、これを広東本地人における南雄珠璣巷伝説などとともに「祖先同郷伝説」と規定し、海南島ではマジョリティである海南話話者の莆田県甘蔗村伝説がマイノリティである他の方言話者集団にも受容されていることを論じている [牧野 1985: 28]。
- (4) 『儋県志』によれば、黎南蛇（1457年ころ～1502年）は県西南部の七坊岫出身のリー族とされ、弘治14年（1501年）にリー族住民を率いて空前の大反乱を起こし、儋州、昌化などを包囲、感恩城を攻略した。官兵3000人を殺害したが、最後は矢に当たって戦死した [海南省儋州市地方志編纂委員会編 1996：719-720]。
- (5) 聯姓とは、複数の姓が歴史上の縁故などを名目として連合して活動を行うことを指し、たとえば『三国志演義』にちなむ劉、関、張、趙の連合などがある。珠江デルタ地域の黎姓の場合、何姓、江姓とともに清代には広州に三姓共同の会館「三益書室」を保有していた。また、20世紀初めにはニューヨークに「三益総堂」が設けられたという。
- (6) 実際の字は「朗」の下に「土」が付く。フォントにないのでここでは「朗」の字で代用する。
- (7) この水準を超えるのは、広東省内では東莞市虎門鎮などごく少数の郷鎮のみである。
- (8) 祖先の祭壇に花を供える習慣は中国では一般的ではなく、同行為はこの「日本華僑」の日本の生活習慣への同化を指し示すものであるとも考えられる。

引用文献

海南省儋州市地方志編纂委員会編 1996

『儋県志』、北京：新華出版社。

陳捷先 1999

『中国的族譜』、台北：行政院文化建設委員会。

瀬川昌久 2004a

「中国南部の族譜：手書き族譜と印刷族譜の社会的機能の比較を中心に」、*「東アジア出版文化の研究」* 総括班編『東アジア出版文化研究 こはく』、知泉書館。

————— 2004b

『中国社会の人類学—親族・家族からの展望』、京都：世界思想社。

国家統計局農村社会経済調査総隊編 2003

『中国郷鎮統計資料—2003』、北京：中国統計出版社。

牧野 巽 1985

『牧野巽著作集 5・中国の移住伝説』、東京：お茶の水書房。

Freedman, Maurice 1958

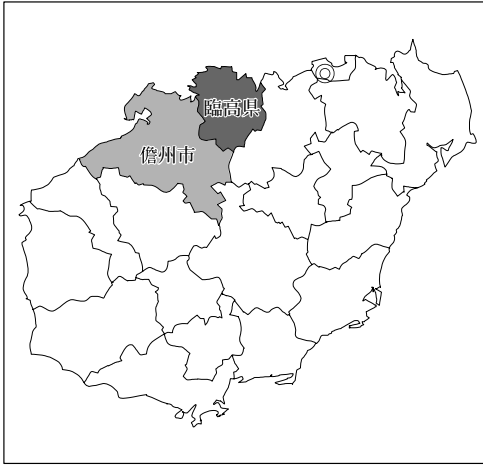
Lineage Organization in Southeastern China. London: The Athlone Press.

————— 1966

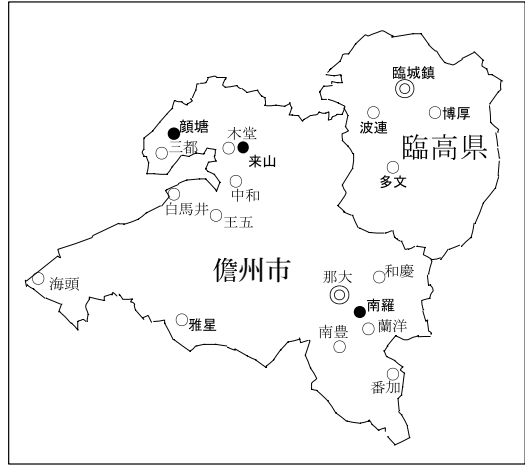
Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung. London: The Athlone Press.

付記

本報告は、平成13～16年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの出版文化」(領域代表・磯部 彰教授)の計画研究「中国南部の族譜：版本と手鈔本の社会的機能の比較を中心とした研究」(代表者・瀬川昌久)の成果の一部である。



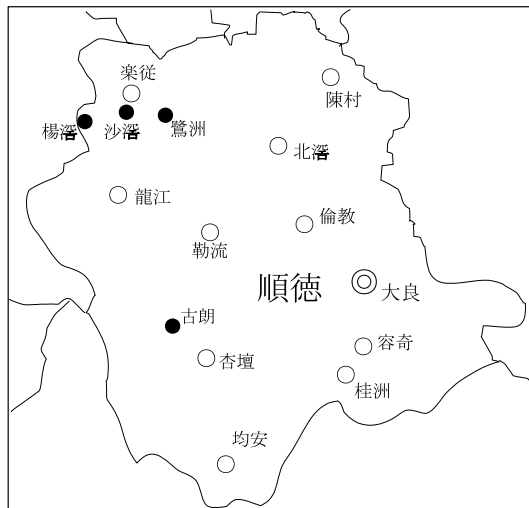
▲海南省



▲儋州市と臨高県



▲広東省



▲佛山市順德区